

今年の七月に東北大学の川島隆太教授の講演を聴いた。川島教授は現在スマート・エイジング国際共同研究センター長である。川島教授が提唱する「スマート・エイジング」は、いわゆる「アンチエイジング」のように年をとることに對するネガティブな概念とは全く異なるものである。高齢期を「知的に成熟する人生の発展期」として積極的に受容しようとするものであり、高齢社會に對する考え方のパラダイムシフトとも言えるものである。この講演からスマート・エイジング・シティという概念を考えた。筆者は、都市や交通に關する講義の時にはよく都市を人あるいは患者になぞらえて説明する。患者の治療法に食事療法から手術まであるように、都市問題にも経済的施策からインフラ整備まで多様な治療法が存在する。患者の場合は年齢や体格等に合せて治療方針を決め、その処方箋を作る必要がある。都市の場合も同様で、その都市の状況に合わせた政策を立案し、その実現のための手段を組み合わせる必要がある。わが国の「都市の高齢化」に伴う人口減少と都市変化を「縮退都市」として捉えることが多い。筆者が代表の研究グループでも、昨年度から三カ年にわたって実施している科研究費の研究課題を「縮退状況における都市マネジメントのための世帯マイクロシミュレーションシステム」としている。この研究は人口減少だけでなく、年齢や世帯構成の変化、そしてその分布

各 人 各 説

スマート・エイジング・シティ

東京都市大学環境情報学部教授

宮本和明

Kazuaki Miyamoto



を的確に捉えることが不可欠と位置づけ、政策立案と処方箋作成のための方法論を構築することが目的である。その中では、福祉や教育等の広範な公共サービスをも対象としている。

筆者はこのように自ら「縮退」なる用語を使いながらも、そのネガティブなニュアンスから、前向きに都市の将来を捉える姿勢を示す適切な言葉はないかと考えていた。川島教授の講演はこれまで通り「人」とのアナロジーで考えることを筆者に気づかせてくれた。早速、講演後の懇親会で川島教授に都市も人と同じであるとの話をし、筆者のテーマとして「スマート・エイジング」を使うことの了承を得た。

スマート・エイジング・シティにおいては、賢く公共サービスを提供することにより、住民の生活の質を向上させる必要がある。そのためにはまず、交通における需要マネジメントの考え方をより広範な公共サービスまで拡張した「公共サービス需要マネジメント」の発想が必要である。公共サービスに對する需要は土地利用さらにはタイプ別の世帯分布に依存する。都市の縮退ではなく都市構造を賢く改善することが不可欠である。一方、公共サービスの供給側も、そのためのインフラ整備や更新、維持・管理、運営に關して、資金調達と財源を含めた効率的な事業スキームを考えていく必要がある。

川島教授の発想を参考に、都市のスマート・エイジングに貢献していきたい。